

中国のほんの話(87)

## 世に猫好きは多けれど… 陳子善先生と猫

蔭山達弥



謹賀新年。今年はねずみ年、ねずみの天敵と  
言えば猫。私たち夫婦も大の猫好きだが、長期  
間帰省することがあるので、残念ながら猫は飼  
えない。仕方なく近所の大型複合商業施設内  
にあるペットショップに行き、高価で可愛い  
生後二、三ヶ月の子猫を見たり、自転車で大  
きな公園に出かけ、そこに棲み着いている野  
猫たちを見物するのが恒例行事になっている。

我が尊敬する陳子善先生（中国文学研究者・  
華東師範大学名誉教授）も大の猫好きのお一  
人。先生の猫好きについて、宮立は次のよう  
に書いている。（原題《陈子善老师的“痴迷”》、  
『中華読書報』2019年4月10日）

「陳先生は猫が好きだ。ご自身で猫を飼  
い、日々猫を相手にしている。先生が“新  
浪網”のマイブログに投稿を始めてから、  
猫はフォロワーのホットな話題になり、  
先生が飼っている陳皮、陳弟、陳多の三  
兄弟はフォロワーの関心の的になった。単  
に猫を飼うのも良いことだが、先生の収  
集癖と考証癖は猫に関する文章や絵に進  
軍を始めた。猫を題材にした中国画、油  
絵、版画、彫塑、蔵書票、切手、絵はが  
き、カレンダー、写真集など。全て先生  
の収集の範囲に属する。先生は『猫啊，  
猫』（中国山東画報出版社、2004年）  
という本を編集した。初版は八千部、す  
でに二度重版したそうで、好評なのは明  
らかだ。『猫啊，猫』は紙幅の関係で、  
中国人作家の猫に関する散文をただ収  
録しただけなのだが、中国人作家のあ  
ふればかりの猫に関する文章を集めて  
きて考察することは、もう一つの二十  
世紀散文史を読み取るだけでなく、二  
十世紀中国社会の大きな変遷を窺い知  
ることもできる。これも文学史を改め  
て書く一つの方法ではないだろうか。語  
られているのはやはり文学史の視野に  
おける人や出来事ではないか。猫に関  
して、陳先生は深圳关山月美術館にお  
いて「現代文人の猫に関する絵画文章  
から日常生活と社会変遷を見る」と題  
して、学術講座をされている。」（上  
述）

陳先生が責任編集をされて刊行された  
猫に関するアンソロジー、その名もズバ  
リ『猫』（中

国人民文学出版社、2012年）には四十  
八人の著名作家が猫をテーマにして書  
いた文章が収められている。その中の  
一篇、老舎が1959年8月に執筆した  
『猫』、その冒頭部分を読むと、あた  
かも猫がそばに居るような感覚にと  
らわれる。

「猫の性格は本当にちょっと風変わり  
だ。猫がおとなしいと言えば、猫は確  
かに良い子な時がある。猫は暖かい場  
所を見つけては、一日中ぐっすり寝  
て、何の心配もない。何事にも口出  
しをしない。しかし、猫が遊びに出  
かけようと決めたら、一昼夜出か  
けてしまい、誰がどんなに呼び掛  
けても、猫は帰ってこようとしない。  
猫が遊んでばかりいると言えば、確  
かにそうである。そうでなければどう  
して一昼夜、家に帰ってこないのだ  
ろう。けれども、猫の耳元にねず  
みの物音が届いたら、猫は懸命に職  
責を果たそうとする。息を殺して、  
ねずみをじっと見つめて数時間、  
ねずみが出て来るまで待ち続ける。

猫が嬉しいなら、誰よりも優しく  
親密だ。体を足にこすりつけてくる、  
首を伸ばして、爪でかいて欲しいと  
要求する。原稿を書いている時、  
机の上に飛び乗り、紙の上に小さ  
な梅の花（足跡）をつける。猫は  
さらに色々な調子で鳴くことができ  
る。長さが違い、声の太さも異な  
って、変化に富み、単調さを努めて  
避けようとする。猫が鳴かない時  
は、グルグルと気晴らしをする。こ  
れは猫が嬉しいからだ。猫の機嫌が  
もしも悪かったら、誰がどれだけ  
良い話をして、猫は一声も声を出さ  
ず、半分の梅の花も原稿用紙につ  
けようとする。猫はとても強情だ。」  
（拙訳）  
“猫宁！”（「マオニン」、  
'Morning'のつもり）  
今日も陳先生のブログは愛猫の写  
真で始まる。

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）